３年ＺＨＲ組銀八先生～リピート作品だが気にするな～

岡崎結弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３年ＺＨＲ組銀八先生～リピート作品だが気にするな～

【Ｎコード】
Ｎ０９３７Ｏ

【作者名】
岡崎結弦

【あらすじ】
あのバカどもが卒業し、ようやく安息の一時を手に入れたと思った矢先、銀八は校長から話があると呼び出され……

面倒いので以下略。バカどものクラスに新たな仲間が加わり、さらに賑やかに！銀八は果たして無事彼らを卒業させることができるのかっ！？青春ギャグコメディ銀八先生！始まるぞコノヤロォオオオオオオっっ！！

滅茶苦茶投げやりだが気にするなっ！！

第一講　銀魂のタイトルって考えるの面倒くさいよね。マジで（前書き）

「人生はプラスマイナスゼロって言う奴は、決まってプラスの人間なんだ」《球磨川禊》

「人生はプラスマイナスゼロだ。よし、これで俺もプラスの人間に……」《長谷川》

「なれませんよ」《新八》

第一講　銀魂のタイトルって考えるの面倒くさいよね。マジで

ここは銀魂高校。

卒業式が終わり、ようやく3年Z組のアホど……もとい憎たらしくも可愛らしいかどうか微妙な生徒達から解放された銀八先生。

そんな彼は今、校長室のソファーに寝転がりながら、鼻糞をほじってジャンプを読んでいる。

銀八
「で？話は何すか？係長」

青筋を額に浮かべながらバカ……ハタ校長は、校長椅子に座って、銀八を睨んでいた。

バカ
「今、バカっつったよね？てか、何これ？何で余の名前の表示がバカになってるの？」

気のせい気のせい。

バカ
「いや気のせいじゃねぇだろっ！」

銀八
「うるさいっすよ係長。ジャンプに集中出来ないじゃないっすか」

組んでいた足を反対にしながら、銀八が目をジャンプに向けたまま

言う。

バカ
「いやさっき突っ込むの忘れたけど、ここ校長室だからね？君の部屋じゃないからね？後、校長だから」

銀八
「げっ、ＯＮＥＰＩ○ＣＥ四週休みかよ。さぼってんじゃねーよ尾○」

バカ
「話聞けよっ！後、尾○先生に失礼だからっ！ほら、教頭も何か言え」

横に立って、ヤングジャンプを読んでいる教頭に、バカが声をかける。

教頭
「坂田先生、駄目ですよっ！尾○先生にだって事情があるんですからっ！それに四週空いたほうが、楽しみが増えるでしょうっ！」

バカ
「そっちの注意かいっ！後、おめーもヤングジャンプ読んでんじゃねぇっ！」

教頭
「すいませんバ……ハタ校長」

バカ
「おい。今、バカって言い掛けたよな？そうだよな？」

銀八
「まぁまぁ。落ち着いてください」

そう言って、葉巻をふかし、さっきほじった鼻糞を、ソファーにつけ、ジャンプを読むのを再開する。

バカ
「おめーが言うんじゃねぇっ！てか、話が進まんからっ！行数稼ぎだと思われるからっ！」

銀八
「何言ってんすか係長代理。これは紛れもない行数稼ぎっすよ」

その通り。

バカ
「言っちゃたっ！言っちゃたよこの作者っ！」

銀八
「まぁおふざけはこの辺にして、話は何すか？」

バカ
「やっと進むのか……」

教頭
「気にしたら負けですよ、バカ」

バカ
「おめー、後で話があるから、放課後裏庭に来い」

教頭
「えっ！？まさか告白ーーー……」

バカ
「ちげーよっ！何おぞましいこと言ってんだよっ！」

銀八
「そうだぞ。んなことしたら、この小説第一話で打ち切り確定だ」

そんな事したら、バカと教頭はこの小説での出番は、セリフどころか名前すら出しません。

教頭
「そっ、それは嫌だぁっ！」

バカ
「余だって出番が欲しい～～っ！」

あっ、それ無理。これ以降しばらく出ないから。

バカ
「なっ、何故じゃっ！？」

人気ない奴が出番もらえるなんて思ってんじゃねぇっ！！

教頭・バカ
「（ガーーーンッ！）」

ショックを受けて、跪くバカ達。

銀八
「おいおい。いくら事実でも言いすぎじゃねぇの？」
そう言いながら、新しい葉巻をくすねてるお前はどうなの？
銀八
「俺はいいんだよ。主人公だから」
だったら俺も作者だからいいじゃん。
銀八
「そーかい。まぁ、わざわざ呼び出すような面倒くさ……大事な話はもう出来そうにないな」
いや今面倒くさいって言いそうだったよね？絶対そう言いそうだったよね？
？
「やれやれ。だらしない連中だねぇ」
そう言いながら、校長室の扉に入ってくる人物がいた。
銀八
「あっ、理事長。どうしたんすか？」
銀八は、再びソファーに腰掛けて、くすねた葉巻を吸う。
お登勢
「てめーは態度を改めろぉっ！」

銀八
「あべしっ」

理事長が叫びながら、銀八にドロップキックをくらわせる。

銀八
「おいおい。ここは原作のほうじゃなくて、教師って設定だぞ？ばばぁがドロップキックなんてかませるのかよ……」

お登勢
「今更銀魂の世界で、そんなことが気にされるとでも思ってんのかい？」

銀八
「そりゃそうだな。で、理事長は何でここに？」

理事長
「そこの役立たず共が、アンタにちゃんと説明してるか不安になってね。念のために来たらこの有様さ」

跪いてブツクサ言っているバカ達を見ながら、タバコをふかすお登勢。

銀八
「成る程。で、話って何すか？マジでストーリー進まないんで、さっさと話してくんないっすか？」

お登勢
「わかったよ。単刀直入に言うけど……アンタ、また3年Z組の担

任になったから」

銀八
「……は？」

訳が分からないという顔をする。

お登勢
「だから、また3年Z組の担任になれっつってんのよ」

銀八
「いやあいつら卒業したじゃ……」

お登勢
「あいつらが本当に卒業出来る程、単位を取ってると思うかい？」

銀八
「……あっ」

銀八は、納得したような顔をする。

銀八
「全員っすか？」

お登勢
「全員じゃないよ。作者が好きなキャラだけにするらしいからね」

銀八
「自由だなオイ」

お登勢
「それにそれだけじゃないよ」

銀八
「まだあんのかよ……」

呆れたように銀八が呟く。

お登勢
「ミッドチルダ高校と、アメストリス高校って知ってるかい？」

銀八
「どっちも、超有名高校じゃないっすか。そのエリート高がどうかしたんすか？」

お登勢
「その二高の理事長が、あんたの行動に感銘を受けたそうなんだよ」

銀八
「行動？」

お登勢
「文化祭での騒ぎを収める。銀行強盗から生徒を守る。修学旅行で生徒の因縁を断ち切る……他にもいろいろやったろう？それが向こうの理事長の耳に入って、あることを頼んできたんだよ」

銀八
「あること？」

お登勢

「ぜひウチの学校の生徒を、アンタを担任にしたクラスに、期間限定で交換留学させて欲しいって。後、オプションで教師も何人か来るらしいよ」

銀八
「何すかそのご都合主義？あり得ないくらい始めから都合よすぎでしょ。てか、教師はオプション扱いっすか？」

お登勢
「んなことはどうでもいいんだよ。で、やってくれるかい？」

銀八
「面倒くさいからヤです」

お登勢
「給料が２０％ＵＰするんだけど……」

銀八
「任せてください。必ずやこの銀八、ミッションを完遂してみせます」

一瞬で態度を改める銀八。金にがめついのは相変わらずである。

まぁそんなこんなで、銀八は再び3年Ｚ組及び新たな生徒達の物語の、幕が開けた。

第一講　銀魂のタイトルって考えるの面倒くさいよね。マジで（後書き）

はい。という訳で、思いつきでやって見ました！

駄文ですいません。

前書きの名言コーナーで、使って欲しいのがあったりしましたら、感想の欄に書いておいてください。てか、ぶっちゃけ書いてください（フライング土下座）。

ネタがないんですっ！まだ一つ目なのにっ！

だから、こんな話をして欲しいというのもあったら、ぜひ、ぜひっ！書いてください（土下座）。

報告は以上です。それではまた次回。

……読んでくれるとうれしいな。

第二講　第一印象が最悪でも人間関係は作れるはずだと信じればフリーダムになる

「どんな人間でも、安いプライドがあれば戦えるんだ」《ジョンス・リー》

「お妙さんっ！！靴の裏舐めるんで付き合ってくださいっ！！（土下座）」《近藤勲》

「あんたはちょっとはプライド持てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっ！！」《志村新八》

第二講　第一印象が最悪でも人間関係は作れるはずだと信じればフリーダムになる

銀八
「という訳で、お前らもう一辺3年生やることになったから。以上」

そう言って、教室を後にしようとする銀八。

新八
「……ってちょっと待てぇっ！！」

新八のシャウト。

教室には、卒業したはずの3年Z組の生徒が集まっていた。

因みに、時期はまだ春休みである。

新八
「何でもう一回3年やらなきゃいけないんですかっ！？」

銀八
「てめーらが単位とらなかったからだろーが」

面倒くさそうに答える銀八。

新八
「いやそれにしたって滅茶苦茶でしょうっ！これ絶対にリピート企画になってるからっ！」

銀八

「はいナイスツッコミ～。じゃあまた入学式に会おうぜ～」

そう言って、サンダルをペッタペッタならしながら教室を去った。

新八

「……え？終わり？」

そう呟くしかできない新八だった。因みに、教室にいた他のZ組メンバーは、誰一人としていなかった。

まぁ要するに、集まったのが新八だけなのである。

何でかって？

それは数日前に、すでに他のメンバーには話してあるからだ。

新八と山崎は、地味なので存在を忘れられていて、今日説明した次第である。

因みに山崎は、またしても忘れられていた。

ーーー

まぁそんなこんなで入学式当日。

体育館の壇上には、交換留学生やオプションの教師がいた。

バ……ハタ校長のくそ長い話を、銀魂高校の生徒は誰一人として聞いていなかった。

新八
「（……あー、やっぱまだ納得できない）」
校長の話を、右から左に聞き流しながらそんな事を思っていた。
新八
「（先生や銀魂の世界での無茶は今に始まったことじゃないけど、今回はレベルが違くね？）」
沖田
「（全くでさぁ）」
いきなり沖田が新八に語り掛けた（心で）。
新八
「（ですよねぇ……って、何で心の中わかるんですかっ！？）」
沖田
「（この小説には、リリカルなのはの設定も入ってるんでさぁ。つまり、念話をしても問題は……）」
新八
「（あるわぁっ！一応僕ら学生って設定だからっ！魔法使えない設定だからっ！）」
沖田
「設定なんて常識、俺には通用しませんぜ」
新八

「いや少しは自重しろぉっ！！」

そこで新八はハッとする。今は入学式の演説中。皆ダベってはいるが、普通のトーンで話している。当然、新八のように叫んでいる生徒など一人もいやしなかった。つまり、滅茶苦茶注目を浴びていた。

神楽
「ぱっつあん、何やってるアルか？とうとう頭がおかしくなったネ？」

新八
「……うぅ」

流石に今回は何も言い返せないダメガネ。

新八
「誰がダメガネだっ！」

地の文にツッコミいれるなよ……まぁ、ダメガネの方は置いといて。

まぁ、３Ｚの面々については今更語ることもないので、交換留学生の説明とかしとくかね。

３Ｚ一同
「ふざけんなぁあああああああああああああああああああっ！！」

無視無視。

さて、壇上にいるのは、うざったい話を延々としているバカと、その隣に立っている教頭は置いといて、端っこに集まっている十数名の生徒と、オプション教師の名前だけ紹介しておこう。

生徒、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやて、シグナム、ヴィータ、エドワード・エルリック、アルフォンス・エルリック（鎧バージョン）、ウェンリィ・ロックベル、リン・ヤオ、その他。

教師、シャマル、ヴァイス、ジェイル・スカリエッティ、ロイ・マスタング、リザ・ホークアイ、ヒューズ、以下略。

新八
「いや適当すぎィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！」

新八のシャウト。だが、そんなものはもちろん無視。

新八
「いや無視したら駄目だろっ！！」

くどい奴め……それより気付かないのか？

新八
「え？何が？」

我らが銀ぱっつぁんが、この入学式にまだ登場してないことにっ！

新八
「……いやな予感しかしないんだけど」

神楽
「おいダメガネ。さっきから誰と話してるアルか？」
妙
「新ちゃん、病院に行く？」
新八
「えっ？さっき皆も叫んでましたよね？」
３Ｚ一同
「知らない」
新八
「目をそらすなぁあああああああああああああああっ！！」
バカ
『こらぁっ！そこのバカ共！さっきからうるさいぞっ！』
３Ｚのうるささに耐えきれず、演説中ということも忘れて怒鳴りつけるバカ。
ピンポンパンポーン
『あーテステス』
いきなり、スピーカーから銀八の声が聞こえてきた。新八は、それを聞いた瞬間、自分の予感は正しかったと確信した。

『おぃじーさんにインチキくさそうなMS（マッドサイエンティスト）。これでホントに声聞こえてんだよな？』

『心配するな銀の字。わしとスカリエッティの発明品じゃ。妨害ジャックくらい訳ねぇよ』

『いやそこの奴とはさっき知り合ったばっかだよな？』

『科学者同士が友情を結ぶのに、時間なんて必要ないさ』

『いや、ここじゃお前化学の先生だから。科学者じゃないから』

『設定なんて無視するのが銀魂だろう？』

『おーい。もはやラスボスの片鱗すら無くなってるぞー。キャラが初登場の時点で壊れてるぞー』

『銀の字、早くしろ。松平の奴がこっちに向かってやがる』

『マジかよっ！？やっべ……えー、新入生諸君。及び、交換留学生諸君にオプション。この学校に入るにあたって、覚えておいてもらいたいことがある』

新八

「……」

新八は、この時点で何となくオチがわかった。

『まずひとーつ。教科書の代わりにジャンプを持ってくることー』

『ふむ。中々ユニークな発想だね』

『ふたーつ。先生にいつもお弁当を持ってくること。先生金ないから』

『どれだけ薄給なんだね君は』

『はいみーっつ。三つ目は……特にねーや』

『適当に言えばいいさ』

『じゃあ銀魂、ハガレン全巻及び、リリカルなのはＤＶＤシリーズ全巻買うように』

『私の活躍、しかとその目に焼き付けたまえ』

『いやあんた悪役だろ。ラスボスだろ』

『気にするな』

『気にするっての』

『そうだよねー。オジサンも気にするなー』

『ほら、とっつぁんもこう言って……ホワッツ？』

『坂田せんせーい。いくらぁ何でもやりすぎだ』

『いやそういうアンタは何でバズーカなんて持って……』

ドガァァァァァァン！

ザー

それ以降、スピーカーから音が出ることはなかった。

新八

「いやどーなったのぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！？」

新八の叫びが、虚しく体育館に響き渡った。

ーーー

職員室。

そこには、ミッドチルダとアメストリスから来た先生と生徒。それに理事長とバカコンビ、銀八がいた。

エド

「先生。何で黒焦げなんですか？」

エドが真っ黒になっている銀八とスカリエッティ、源外を見て尋ねる。

銀ス源

「ドーナツ作りに失敗した」

エド
「いや嘘つけぇっ！！絶対さっきの放送と関係あるだろっ！！」

銀八
「ピーピーうるせぇんだよ。発情期ですかコノヤロー」

ロイ
「何言ってるんですか坂田先生。まだ小学生にそんな事あるはずないじゃないですか」

エド
「誰が小学生だっ！」

銀八
「じゃあ豆でいいだろ豆で」

ロイ
「さすが坂田先生。よく分かってらっしゃる」

エド
「……こんのクソ大佐」

ロイ
「鋼の。今は大佐ではなく先生だ」

エド
「俺だって今は只の一生徒だっての」

銀八
「原作との設定の違いを銀魂以外のキャラが話してんじゃねぇ」

ロイ
「それは差別ですよ先生。あっ、鋼の錬金術２５巻、絶賛発売中です」

エド
「エドワード達は、元の体に戻れるのか？皆、絶対買って見てくれよな」

銀八
「自重しろォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

スパスパーン

名簿で二人の頭を叩く銀八。ホントに自重しろよ。え？俺も？いやそこは作者だから別にいいじゃん。みたいな？

バカ
「坂田先生。自分の新しい生徒の顔をよく見ておくのじゃぞ。てか、いつまでバカって表示なの？」

この作品が終わるまで。

バカ
「それずっとって意味かっ！？ずっとって意味かっ！？」

銀八
「同じこと二回言ってんじゃねぇ。後、地の文へのツッコミが多い。作者、ちゃんと気を付けろよ」

申し訳ない。そういう指摘は新八の役目なのに……

アル
「えっ！？そっちを謝るの！？」

ヴィータ
「もう無茶苦茶だな……」

はやて
「気にしたら負けや」

銀八
「情けないぞ関西人」

はやて
「関西人イコールお笑いの方程式やめてくれへんっ！？」

フェイト
「は、はやて。落ち着いて……」

はやて
「離してフェイトちゃんっ！あの天パにお笑いが何たるかを……」

銀八
「誰が天パだエセ関西人っ！！」

はやて
「エセやとっ！？もう我慢できんっ！！今日は朝までお笑い討論やっ！！」

銀八
「上等だコラッ！こちとら元気とバカだけが取り柄のカオス生徒どもの担任やってきたんだ！！てめぇごときが俺に勝てると……」

理事長
「いい加減にしやがれこの天然パーマッ！！」

銀八
「あべしっ！」

理事長のドロップキックが、銀八の顔面に炸裂。

ドガァッ

吹っ飛ばされ、机にぶつかる銀八。

銀八
「てててて……くっそ。ちょっと羽目はずしすぎたか……」

なのは
「何で羽目はずすんですか……」

シグナム
「気にしたら負けだ」

ヒューズ
「面白い先生だな」

ロイ

「おいヒューズ。頼むから生徒に惚気を披露するなよ？」

ヒューズ
「何だとっ！？ンなこと許される訳ないだろっ！生徒だって俺の可愛い女房と娘の話を聞きたいに……」

銀八
「それは独身（おれ）への当て付けかァッ！！？」

ヒューズ
「ひでぶっ」

銀八のドロップキックで、ヒューズがぶっ飛ぶ。

ロイ
「先生、よくやってくれました」

銀八
「勿論ですよ独身（どうし）。俺達にとって既婚者（あれ）は害虫ですから」

はやて
「こいつらホンマに教師かっ！？」

源外
「嬢ちゃん。この程度でうろたえたら、この学校、特に銀の字のクラスじゃやっていけねぇぜ？」

フェイト
「……何か、早速ここに来たことを後悔してきたよ」

なのは
「私も……」

エド
「アル、今からでも元の高校に戻らねぇ？」

アル
「駄目だよ兄さん。そんな事言っちゃあ」

エド
「だってあいつが担任だろ？最悪じゃん」

ロイ
「因みに、副担は私だ」

エド
「帰らせろォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

銀八
「ったく。ピーピーピーピーうるせぇな。誰のせいですかコノヤロー」

生徒一同＆バカ＆理事長
「お前のせいだよっっ！！」

まぁその後収集に３０分程かかり、生徒と銀八とロイは、三年Ｚ組の教室に向かった。

エド

「ホントに帰らせてくれ……」

なのは

「にゃはは……」

第二講　第一印象が最悪でも人間関係は作れるはずだと信じればフリーダムになる

名無し三等兵さん、ありがとうございましたっ！

これからもリクエスト待ってますっ！

銀八
「俺が返しやすいセリフ待ってるぞー」

あっ、そういやまだ前書きに出てなかったな。

銀八
「ったくよー。あそこは俺とぱっつあんの十八番だぜ？早く出してくれや」

近いうちにな。でわまた次回ー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0937o/

３年ＺＨＲ組銀八先生～リピート作品だが気にするな～

2010年10月10日07時23分発行